高校３年、秋の運動会

この運動会を最後に女子のブルマ姿を見納めになった。

運動会終了後、体育委員のオレは体育倉庫に椅子やテントを片付ける作業をはじめた。

家に帰って、目の裏に焼き付けた女子のブルマ姿をオカズにすることだけが励みだった。

　下側室で運動靴に履き替えるときのブルマ姿

　準備体操のときのブルマ姿

応援に夢中になって立ち上がるブルマ姿

おしりに食い込んだブルマをなおすしぐさ

完璧に記憶し、思い出しただけで股間が反応した。

蒸し暑い体育倉庫に足を踏み入れると、同級生で同じ体育委員の桃野舞がいた。

美しい黒髪のボブカット、積極的な性格で成績優秀スポーツ万能の美少女であるにもかかわらず、

恋愛経験ゼロで校内校外に熱狂的なファンがいる。

もちろんオレは一年のときからベタ惚れで、毎日のオカズの第一候補だった。

パラレルワールド

「アッ　田中君、おつかれ　私もう帰るから、後お願いね」

今日の体育委員の作業が終わると、舞と二人だけになるチャンスが無くなってしまう。あせったオレは舞を呼び止めた。

「舞ちゃん！待ってくれ！」

「何？」

「舞ちゃん、オ…オレ、舞ちゃんのことが一年の時からずっと好きだったんだ。オレと付き合ってくれないか？」

オレは必死に声を振り絞って告白した。

「フ～ン　田中君がねぇ～」

オレは極度の緊張状態だったのに対し、舞は何か人の心を見透かすような落ちついた様子だった。

「私と付き合って欲しかったら、私のお願い聞いてくれる？」

「う、うん何でも聞くよ」

「それじゃ、そこの跳び箱の上に寝てくれない？」

ちょうど椅子がわりによく使う高さが二段だけの跳び箱があり、オレはそこに仰向けに横になった。

「目を閉じて」

オレは目を閉じた。オレは無邪気に告白をＯＫするキスのサインだと思った。

「目、開けていいよ」

オレは目を開けると、目の前に舞のブルマのおしりがドアップであった。そしてすぐオレの顔に豊満なおしりが下りてきた。

舞はオレの足の方を向き、跳び箱を跨ぐような体制でオレの顔の上に座り込んだ。

舞の柔らかいあそことおしりの感触、そして女の子の匂いがオレの五感を刺激し、オレの股間が瞬時に反応した。

「どお？顔の上に座られた気分は？田中君、一年のときからずっと私のおしりばっかり見てたでしょ？

　そんなにおしりが好きだったら椅子にしてあげる！」

舞はオレの顔の上でおしりを動かした。そのムニュムニュとした柔らかい感触が動いたその瞬間、

オレの鼻に１００年の恋も一気に冷めるようなキツイ尻臭が侵入した。舞はオレの鼻にブルマ越しにおしりの穴をあてがっていた。

オレはその匂いに耐え切れず、つい「うっ　くさい」と言ってしまった。

「クスッ　おしりばっかり見てる変態クン　あなたの幻想壊してあげる。」

**ブッーーーーーーーーーー！！**

オレの鼻先に密着しているおしりの穴から強烈なオナラが発射された。

この世のものとは思えない濃厚な便臭がオレの鼻腔に充満した。

くさい匂いだけでなく、憧れの女の子に顔の上に座られオナラされたというシチュエーションにショックを受けた。

「どお？私のオナラ　目が覚めた？」

舞は、オレの顔の上に全体重をかけ新鮮な空気を吸う隙間を開けてくれない。

オナラの匂いを噛みしめながらオレは蒸し暑い体育倉庫で気を失った。